

「嵐が丘」の愛の概念について

八十木 裕 幸

(一)

この小論はエミリ・ブロンテの作品である「Wuthering Heights：嵐が丘」の魅力についての一考察であり、この作品内に潜んでいる「何が」読者を呪縛するののかについてである。この小説を(1)表状的構成要素、つまり「想像創出部分の挿入と自然描写との係わり、並びに Plot との係わり」という観点からと、(2)この小説の内包的中心命題の「愛」という観点から分析して、この作品の魅力を解明する。

(1)については、次のようにまとめて発表済みである。「この作品の構成要素は3つの形に分けることができる。①筋の組立を時間的に垂直に流すのではなく、行きつ戻りつさせ(例えば第29章)、筋を複雑化して進行させ、読者の思惑、推測、予測を脳裏に残像するように彩色させながら進めている。この残像彩色の記述部分が非常に多いために、神秘的幻想に呪縛される。②他方では、大きな安堵感を与えるプロットを設けている。神秘的幻想と切迫観念与奪部分、さらにこの安堵感部分との落差を大きくすることによって、物語の流れに強弱を与え、大きな感情的、精心的動揺を与えている。③切迫感溢れる記述を設け、否応無しに物語に引き込んでしまう。

この3種の構成と42カ所ほどの自然描写が交錯している。この交錯が読者を魅了する要素になっている。つまり切迫感や緊迫感を与える場面に、創出的想像部分をふんだんに取り入れて思考を際限のないものに

し、この部分に感情豊かな神秘的自然描写を重ねて悲嘆さや安堵感、時には神秘的想念を常に抱かせている。さらに胸をさすような毒々しく凄まじい語彙や恐ろしいほどの情熱的激烈さが、読者の感情を増幅させ、はらはらさせ続けストーリーを見透かせない。創造的或いは創出的想像を駆り立てる部分が全編を通して190ヵ所程ある。波動のごとく最後まで読者に迫り続けている。想像力は恐怖をかきたて、心に疑念を生み出させる。これがこの作品に威容な力強さを与えている。別の視点から単純に、この作品の流れを大きく捕らえると、第1章から第3章は読者に内容を感じさせず、物語の行方に対し思いがけない時差の表現を用いて時間に彩色を施し、興味、好奇心、不安、興奮を大いに与え、イメージを膨らませる物語の導入部分となっている。第4章から第9章はキャサリンとヒースクリフの愛の引き合いと、ヒースクリフが暴虐、憎悪、侮辱を受ける部分である。第10章から34章はキャサリンとヒースクリフの魂の融合の渴望と、これを妨げた者たちに対する復讐である。」⁽¹⁾

ここでは作品の中心人物であるキャサリンとヒースクリフが奥底に秘めている独創的かつ情熱的「愛」についてと、エドガの現実社会的「愛」について、つまり三者の抱く「愛」の概念について論考する。

第1章から第3章までは、嵐が丘に立つスラッシュクロス家の内部の様子や、そこに居住する人たちの人間模様、そこに漂う不吉な予感、そこに陰鬱、狂気、死の様相をおり混ぜて時間を越えて記している。第4章からキャサリン・アンショウが夭折する第16章にかけては、キャサリン、ヒースクリフ、エドガ三者の愛に対する考え方が奔放大胆に表現されている。第17章以降は、怨念と復讐、そして独創的な魂の融合の追求のことが激越した情熱で執拗なまでに描かれている。

(二)

「この小説の大部分をネリーが語り、これをまたロックウッドが記すという二重の構造になっている。この複雑極まる事件と性格の発展との長い物語を一人の老婆の口から語られ、人物の凡てが同じような物の言い方をするという点に、はなはだしい不自然さがあることは否めない。」⁽²⁾

しかし、第1の語り手であるネリーが多くの場面の目撃者として、独善的に陰惨な邪悪さを誇張し、非現実的な幻想的感覚を色濃く表現することによって、読者を翻弄し、強く心を引き付ける要素になっていることは否定できない。彼女の鋭利な観察が、作品の中の超絶した情熱的愛の怪異性を強く滲みだしている。

キャサリンとヒースクリフ、そしてそれに絡むエドガとの宿命的な愛の過程を「自然への普遍的思慕と永遠性の追求」であるという見方とは別に、ここでは愛情表現の部分を抽出集約して白熱した情熱的独創性の愛について考えることにする。

先に述べた通り、第1章から第3章までは、読者をこの作品に引き込むための導入部分であるので、第4章から見ていくこととする。

第4章

Miss Cathy and he were now very thick; but Hindley hated him! and to say the truth I did the same; and we plagued and went on with him shamefully: for I wasn't reasonable enough to feel my injustice, and the mistress never put in a word on his behalf when she saw him wronged.

He seemed a sullen, patient child; hardened, perhaps, to ill-treatment: he would stand Hindley's blows without a wink or shedding a tear, and my pinches moved him only to draw in a breath and open his eyes, as if he had hurt himself by accident and

nobody was to blame. This endurance made old Earnshaw furious, when he discovered his son persecuting the poor, fatherless child, as he called him. He took to Heathcliff strangely, believing all he said (for that matter, he said precious little, and generally the truth), and petting him up far above Cathy, who was too mischievous and wayward for a favourite.

So, from the very beginning, he bred bad feeling in the house; and at Mrs.Earnshaw's death, which happened in less than two years after, the young master had learned to regard his father as an oppressor rather than a friend, and Heathcliff as a usurper of his parent's affections and his privileges; and he grew bitter with brooding over these injuries.

キャサリンの父親が⁽³⁾リバプールの町の中でジプシーの子をみつけ、飢えて、物も言えぬほど弱っているのを目にして、拾いあげて家につれてきた。しばらくすると、粗野なヒースクリフとキャサリンはすっかり仲良くなったが、彼は人に感謝するとか、恩を感ずることがなく強情であった。養父アンショウの寵児であることを逆手にとり、ヒンドリのものを計画的に奪うほど非人間的で生意気で性悪であった。それに対してヒンドリはヒースクリフに暴力を振るい、罵倒し、憎悪した。父親は、そうした息子ヒンドリに腹を立て激昂した。

第5章

牧師補のすすめもあり、ヒンドリは家を離れて大学に行くことになった。それは父親の心が疎隔し、息子に対する愛情が冷え失せてしまった結果であった。

キャサリンは、周囲の者がハラハラするほど、悪戯を一日に何十回もくり返した。情緒不安定で、感情の起伏が激しく、女王でいなければ気

が済まないような意地の悪いところもあった。一方、目が綺麗で、かわいらしい、時として父親に甘える情のある娘でもあった。しかし叱られると、ふてふてしくなり、口答えをし、人の嫌がることをして楽しんでいるような邪悪さもあった。

She was much too fond of Heathcliff. The greatest punishment we could invent for her was to keep her separate from him: yet she got chided more than any of us on his account. In play, she liked exceedingly to act the little mistress; using her hands freely, and commanding her companions: she did so to me.

皆が一緒に過ごしていた夜、アンショウは炉端の椅子⁽⁴⁾にかけたまま静かに亡くなった。その時の二人の驚愕と号泣は、胸を張り裂けさせるほどであった。

The little souls were comforting each other with better thoughts than I could have hit on: no parson in the world ever pictured heaven so beautifully as they did in their innocent talk: and, while I sobbed and listened, I could not help wishing we were all there safe together.

この表現を境⁽⁵⁾にして謎めいた二人の世界がはじまる。上記の文から憶測するならば、未来に二人が辿り着こうとした不変不滅の精霊の漂う幸国の世界を語り合っていたのかもしれない。それは、肉体が滅びたとしても、不滅の生命への一過程と見做し慰め合ったのかもしれない。

第6章

ヒンドリは3年ぶりに、妻となったフランセスを連れて父の葬儀のため帰ってきた。その彼女は病気がちのようであった。最初のうちはキャサリンに対しても愛想がよかったが、それもすぐ冷めて不機嫌になった。フランセスがヒンドリにヒースクリフを気に入らないと告げ口する

と、彼は無愛想になると同時に、ヒースクリフに対する昔の憎悪の念が頭を持ち上げる。

A few words from her, evincing a dislike to Heathcliff, were enough to rouse in him all his old hatred of the boy. He drove him from their company to the servants, deprived him of the instructions of the curate, and insisted that he should labour out of doors instead; compelling him to do so as hard as any other hand on the farm.

Heathcliff bore his degradation pretty well at first, because Cathy taught him what she learnt, and worked or played with him in the fields. They both promised fair to grow up as rude as savages; the young master being entirely negligent how they behaved, and what they did, so they kept clear of him.

このような仕打ちの連続がヒースクリフに益々、ヒンドリに対しての憎しみを増幅させ、半ば野性的とも思える非情さへ駆り立てたのである。キャサリンもヒースクリフに同調した。

He would not even have seen after their going to church on Sundays, only Joseph and the curate reprimanded his carelessness when they absented themselves; and that reminded him to order Heathcliff a flogging, and Catherine a fast from dinner or supper.

ヒースクリフは拾われて来たときから、粗暴で醜悪な傾向があった。⁽⁷⁾キャサリンは、彼の神秘性と何にも捉われない純朴な性格に魅入り、行動を共にした。ヒンドリは、まるで悪魔の世界から来たような黒い子が気に入らなかった。そのような二人の行動が感じさせる陰険な不気味さへの凝らしめだったのだろう。

But it was one of their chief amusements to run away to the moors in the mornig and remain there all day, and the after

punishment grew a mere thing to laugh at. The curate might set as many chapters as he pleased for Catherine to get by heart, and Joseph might thrash Heathcliff till his arm ached; they forgot everything the minute they were together again: at least the minute they had contrived some naughty plan of revenge; and many a time I've cried to myself to watch them growing more reckless daily,

ヒースクリフの粗暴さと執念深さ、そしてキャサリンのあいも変わらぬ感情の起伏の激しさと我侷で何にも捉われずに居たいという願望、さらに何ものにも屈しないという自尊心の強さが二人に復讐を思いおこさせ、その行為を共同でできることに喜びを持ったのである。

I'd not exchange, for a thousand lives, my condition here, for Edgar Linton's at Thrushcross Grange-not if I might have the privilege of flinging Joseph off the highest gable, and painting the house-front with Hindley's blood!"

ある日曜の晩、二人は「スラシクロス屋敷」に興味を抱き、覗きにかけた。そこはすばらしい屋敷で家族が天国にいるような様子だった。…「おれは、どんなことがあっても、いまのおれの身分とあのスラシクロス屋敷のエドガ・リントンの身分と、とりかえたくない」。

キャサリンはアンショウ家のお嬢さんということと、犬に噛まれ怪我をしたということでスラシクロス屋敷で手厚く遇され治療静養することになり、ヒースクリフは「悪人の相をしている」、「悪性をさらけだしている」、「身震いする」、「怖い」、「ジプシー」、「悪い子」と言われ屋敷から追い出された。キャサリンとヒースクリフを別扱いしたのである。彼は軽蔑され耐えがたい屈辱を受けたので、アンショウ家に対しても憎しみを持つようになった。

a dim reflection from her own enchanting face. I saw they were full of stupid admiration; she is so immeasurably superior to them-

to everybody on earth, is she not, Nelly?"

リントン夫婦と息子のエドガ・リントン、その妹のイザベラ・リントンは現実社会に抑圧され、限られた世界に心を奪われながらも、その社会を安住の世界とみなす人間であり、常に通俗的価値観しか持たない。それに対しキャサリンはヒースクリフ自身と同じ不変の魂と自由を持ち、何にも左右されない不屈の意志を持っている。ヒースクリフの彼女に対する愛は俗世界への非妥協的な魂と自由の共通根を抱いているが故の愛である。ヒースクリフは彼等を自分達とは全く別次元の世界に住む軽蔑に値する人間とみなしたのである。

第7章

5週間ぶりに、キャサリンはリントン家での治療と静養を終えて、アンショウ家に戻ってきた。

Cathy, catching a glimpse of her friend in his concealment, flew to embrace him; she bestowed seven or eight kisses on his cheek within the second, and then stopped, and drawing back, burst into a laugh, exclaiming, "Why, how very black and cross you look! and how-how funny and grim!"

キャサリンはスクラッシュ屋敷での介護で怪我は直った。しかし行儀作法が躰けられ、綺麗な衣装を身につけ、手も驚くほど白く眩しく、気高く取り澄ました様子をし、羽飾りの帽子をかぶり、家に入る仕草も貴婦人のようになっていた。ヒースクリフから見れば表面的な因襲社会の権威と秩序を重んじ、人間の真の願望と情熱を拘束し抑圧する社会に投身していた。一方ヒースクリフは3ヵ月間、涙と埃とにまみれたままの服を着込み、髪の毛をボサボサの延び放題にし、顔や手の皮膚も黒く皮を被ったままになっていた。ヒースクリフは、キャサリンが以前と同じように俗社会の権威と秩序に立ち向かう反逆者であり、共に抱いた魂と

自由の愛を絶対視しながら帰ってくると思ひ、待っていたのである。しかしキャサリンは世俗の社会に染まり翻弄され、露骨に粗野さを示した以前の彼女とは、ほど遠い存在になっていた。彼に接吻したのは魂を分かち合った懐かしさと嬉しさだった。しかし彼女は世俗的な見方で彼を笑い者にした。奇妙な目で見ながら汚いと言った。彼は一途に自分と共通の魂を持った昔の彼女を待っていたのに、皮肉な饒舌で愚弄侮辱された。これまで自分を侮辱し、さらにキャサリンを俗社会の規範に当てはめるように変貌させた周囲の人々に対し、益々激怒し憎悪し復讐を考へるようになった。

“She cried when I told her you were off again this morning.”

“Well, I cried last night,” he returned, “and I had more reason to cry than she.”

彼女はスラッシュクロスで過ごしている間に、抑圧され現実社会に染まり世俗の掟に浸って魂を奪われてしまう。その彼女がヒースクリフをあざけり笑った。自分自身をあざけり笑ったことになるのだが、彼女は気が付いていない。彼女の純真さを信じつつ、俗社会の偽善と偏見に染まっている彼女の感覚を少しでも理解しよう努力する。

ヒースクリフは身綺麗にし、スクラッシュウ屋敷の子供たちと仲良くしてキャサリンを喜ばせようとしたが、ヒンドリに冒瀆され、しかもスクラッシュウ屋敷の者に馬鹿にされる。これに腹を立てた気性の激しいヒースクリフはリントンの物を投げ付ける。ヒンドリはこれに逆上し、ヒースクリフを鉄拳で手荒く暴行を加える。食事にも同席させてもらえず、屋根裏に鍵をかけられ押しこめられてしまう。キャサリンはその事を嘆き悲しみ涙する。彼女は一日中地獄のような苦しみを味わいながらも、ようやくヒースクリフに会う機会を持ち、屋根裏でこっそり何かを話す。ヒースクリフはヒンドリに復讐する手立てを考へる。「この気持ちは神様にはわからないだろう」と言う。

and yet the deepened attraction is not entirely owing to the situation of the looker-on. They do live more in earnest, more in themselves, and less in surface, change, and frivolous external things. I could fancy a love for life here almost possible; and I was a fixed unbeliever in any love of a year's standing. One state resembles setting a hungry man down to a single dish, on which he may concentrate his entire appetite and do it justice; the other, introducing him to a table laid out by French cooks: he can perhaps extract as much enjoyment from the whole; but each part is a mere atom in his regard and remembrance."

上記は語り手のロック・ウッドが話した部分であるが、⁽¹³⁾ 誠実な生命と愛を貫こうとするヒースクリフの生き方と心情を表わしている。俗社会における秩序のなかで上品に穏やかにとりすましながら表面的に過ごす社会の因習的体制に何の意味も見いだしていない。

第8章

ヒンドリとフランセスの間にヘアトン・アンショウが生まれるが、フランセスは他界する。ヒンドリの心の中には妻と自分のことしかなかったので、その反動として泣きも祈りもせず、怒ってののしり神も人も呪い自暴自棄の放蕩に身を沈める。召使達は彼の横暴で意地悪い仕打ちに我慢ができなくなり、ジョウゼフとネリのほかはこの家に残ろうとしなかった。

ヒンドリはヒースクリフを無理矢理に悪魔にしてしまうような陰惨な扱いをする。ヒースクリフは悪霊に取りつかれたように粗暴になる。ヒンドリは野蛮で邪悪な狂暴さを日増しに募らせていく。

At fifteen she was the queen of the country side; she had no peer; and she did turn out a hanghty, headstrong creature! I own I

did not like her, after her infancy was past; and I vexed her frequently by trying to bring down her arrogance: she never took an aversion to me, though. She had a wondrous constancy to old attachments: even Heathcliff kept his hold on her affections unalterably;

⁽¹⁴⁾
キャサリンは15歳になって高慢で我侷で謙虚さのまったくない人間になっていた。しかし昔馴染みの者には驚くほど素直であり、ヒースクリフにさえも前と変わらぬ愛情を持ち続けていた。リントンが同じぐらい彼女の心に食い入ることは難しかったが、野心家の彼女は最初から彼にのぼせ上がってしまい、リントン家をだまそうとは思わなかったのだろうが、いつのまにか二重構造的に考えるようになっていた。キャサリンは表面的にはヒースクリフのことを「野卑なならず者の青年」とか「野獣よりもこわい」と言っていたし、彼をかばおうとしなかった。彼は不快な印象を与える人間になっていて、知識を求める好奇心とか本や学問への愛情とかを持っていたかも知れないが、それも消え失せキャサリンの勉強についていこうという苦心も無くなっていた。人相も心も墮落してしまい悪感を与えるようになっていた。しかしヒンドリが家にいない時、二人は始終いっしょに過ごした。

Catherine and he were constant companions still at his seasons of respite and labour; but he had ceased to express his fondness for her in words, and recoiled with angry suspicion from her girlish caresses, as if conscious there could be no gratification in lavishing such marks of affection on him.

⁽¹⁵⁾
ヒースクリフはキャサリンに対して世俗社会を優先的に見るようになった彼女への失望と憎悪、自分への愛が本当にあるのかという懐疑心を表面的に表わすようになった。ヒンドリの留守の間に、キャサリンはエドガを自宅に招待した。ヒースクリフの二人に対する嫉妬心が深まって

いく。

“The crosses are for the evenings you have spent with the Lintons, the dots for those spent with me. Do you see? I’ve marked every day”

“Yes-very foolish: as if I took notice!” replied Catherine in a peevish tone. “And where is the sense of that?”

“To show that I do take notice,” said Heathcliff.

“And should I always be sitting with you?” she demanded, growing more irritated. “What good do I get? What do you talk about? You might be dumb, or a baby, for anything you say to amuse me, or for anything you do, either!”

“You never told me before that I talked too little, or that you disliked my company, Cathy!” exclaimed Heathcliff, in much agitation.

“Its no company at all, when people know nothing and say nothing,” she muttered.

ヒースクリフにとってキャサリンの言葉は全く予想もしなかったことであり、その無神経さは理解しがたいことだった。キャサリンはヒースクリフをフランス料理のつまみの一口にすぎないような存在であり、あってもなくてもいいような、何の足しにもならない存在だと見做した。彼は、益々彼女に不信感と、やるせなさをもつようになり、裏切られたのではないかという懐疑心から激怒を感ずる。ヒースクリフの彼女への思いは理解されていない。まるでヒースクリフとエドガとは「荒々しい丘だらけの炭坑地から、美しい豊かな谷間にうつったときのような、対照であった。挨拶の声も、その様子と同じくらい違っていた」。キャサリンにとってエドガは平穏と気品を持った心地よい人物であった。キャサリンが使用人のネリに対して見せた「嘘と暴行という二重の罪」にエ

ドガは衝撃を受けたが、しばらくするとお互いにもう恋心を打ち明け合っていた。

第9章

ヒンドリの酒乱によるむき出しの狂気に満ちた威嚇の行為の話で始まる。キャサリンはエドガとヒースクリフの二人に対する愛の気持ちを使用人ネリに告白する。ヒースクリフがキャサリンに内在する本質的魂を現世的欲望から取り戻そうとする様、さらに二人を引き離そうとした者達に対する彼の復讐へと物語は進んで行く。第8章まではヒースクリフとキャサリンの愛の構図が鮮明に表現されず、可能性を漂わせながらも、共通魂への慈しみが主流になっていたにすぎない。あえて言えば、相互に交差する一方的感傷愛、精神愛、過剰愛であり、思慮の差、装飾の差を感じた。一般的愛の過程ではなく、精神的相思の交差であった。愛の絆が不明確のまま、第9章で「私はヒースクリフ！」という言葉がでてくる。これは、彼女が子供のころ自然の中でヒースクリフと共に体験した生命の根源の純一さや神秘の輝きの喜びを共通の精霊として、通俗社会におけるエドガとの表層的愛を通過点としながらも最終的にはヒースクリフとの共通魂の融合への愛、つまり深層的愛を語ったものである。

エドガに対する愛は「美しさ、楽しさ、若々しさ、ほがらかさ、自分への愛情、金持ち、令夫人の可能性、そして彼の全てを愛しているし、今ということだけを考えている」であるという。まさに通俗的社会における表面的短絡的現象によって魅惑された愛であり、人間の魂の真の願望と情熱が窒息させられることをキャサリンは無自覚の中で知り、「どこか、魂が住んでいるところに、あたしの魂の中か心臓の中で、私が間違っているのが、はっきり分かっている」と何かに拘束され抑圧されている不安な思いを覗かせる。つまり自分の魂の中で間違いだと分かって

いることを無視して裏切りを犯す重大さを心では分かっている。

“This is nothing,” cried she. “I was only going to say that heaven did not seem to be my home; and I broke my heart with weeping to come back to earth; and the angels were so angry that they flung me out into the middle of the heath on the top of Wuthering Heights; where I woke sobbing for joy. That will do to explain my secret, as well as the other. I’ve no more business to marry Edgar Linton than I have to be in heaven; and if the wicked man in there had not brought Heathcliff so low, I shouldn’t have thought of it. It would degrade me to marry Heathcliff now;

「ヒースクリフとの結婚は、身をどん底におとすようなもの」というキャサリンの言葉をヒースクリフが盗み聞きした時、根底から突如突き崩されて狼狽し、激怒と不滅の憎悪を抱いてその場から失踪した。ヒンドリへの憎しみ、キャサリンが抱く短絡的愛への怒り、エドガへの憎しみなどが彼の脳裏に深く突きささった。一方では思慕の念を抱きつつ、俗世の浮草に身を任すことに成り果てた彼女の姿を知ったのである。

その後、彼女は、彼が家から姿を消したことを知り、一晩中待ちわびながら胸がはり裂けるほどはげしく号泣し困惑し悲嘆に暮れる。一時危険で殺気を帯びるほど精神錯乱状態になった。スラッシュクロスで静養し、帰宅した後はますます気取って、怒りっぽく、傲慢になったが、病気の危険な発作は納まっているようであった。恋に落ちたエドガ・リントンと結婚して、スラッシュクロスに召使のエレン・ディーンと移り住むことになる。

so he shall never know how I love him: and that, not because he’s handsome, Nelly, but because he’s more myself than I am. Whatever our souls are made of, his and mine are the same; and

Linton's is as different as a moonbeam from lightning, or frost from fire."

⁽¹⁸⁾
天国は「月の光」と「霜」のような澄み冷えきった不変的世界であるが、魂が安住する世界ではない。エドガが属している俗世界は、拘束と抑圧に規制されていて、醜さや真実を覆いかくし、いかに美しくきれいに見せるかに固執し、現在の安泰に執着している世界である。キャサリンが求めているのは、天国にはない不変的魂の世界と、現世の常識的通俗社会の表面的秩序つまりそこにある平穏と表面的気品の世界の両方である。ヒースクリフが求めているのは、激しく「稲妻」のように震撼し、「火」のように燃えたぎる情熱の結果生み出される不変不滅の奥深い純一の魂の世界である。そういう意味では、キャサリンの濁りのある本性より、より狭義な純粹性がヒースクリフにはある。この文節は愛と魂と人間の揺れ動く心を描写した箇所であり、この物語の主要で大切な部分である。

Not as long as I live, Ellen: for no mortal creature. Every Linton on the face of the earth might melt into nothing, before I could consent to forsake Heathcliff. Oh, that's not what I intend-that's not what I mean! I shouldn't be Mrs. Linton were such a price demanded! He'll be as much to me as he had been all his lifetime. Edgar must shake off his antipathy, and tolerate him, at least. He will, when he learns my true feelings towards him. Nelly, I see now, you think me a selfish wretch; but did it never strike you that if Heathcliff and I married, we should be beggars? whereas, if I marry Linton, I can aid Heathcliff to rise, and place him out of my brother's power."

⁽¹⁹⁾
キャサリンの奥底にあるヒースクリフに対する真の思いは、いま惑わされている世俗的愛ではなく、深遠な魂の融合への愛である。二人の魂

の融合があつて初めて全てから解放された自由な世界に存在できるのである。そこは天国でも地獄でもない、二人だけの世界である。その延長上にある言葉が「自分というものは、自分を越えた外にもある『there is or should be an existence of yours beyond you.』という表現になっている。

“My great miseries in this world have been Heathcliff’s miseries, and I watched and felt each from the beginning: my great thought in living is himself. If all else perished, and *he* remained, I should still continue to be: and if all else remained, and he were annihilated, the universe would turn to a mighty stranger: I should not seem a part of it. My love for Linton is like the foliage in the woods: time will change it, I’m well aware, as winter changes the trees. My love for Heathcliff resembles the eternal rocks beneath: a source of little visible delight, but necessary. Nelly, I *am* Heathcliff! He’s always, always in my mind: not as a pleasure, any more than I am always a pleasure to myself, but as my own being, So don’t talk of our separation again: it is impracticable: and
——”

②
ヒースクリフへの愛は魂への愛であり、この結晶はキャサリンの生命体の根源を確保することである。不変の魂を持つヒースクリフと彼女の心に内在する魂が融合すれば、共に生き続けることが出来る。エドガへの愛は通俗社会の価値に従い安住し表面的幸せを求めたにすぎない。彼女の心の中に二つの愛の葛藤が共存したのである。彼女もヒースクリフも、常に変わることはない人間の奥深く存在する同一の魂を持っていた。現世は世の嵐に悩む心の世界であり、一方天国は凍てついた月の光を見ているよな不変でありながら魂が感じられない。二人の求めている魂の融合の世界はどこにも存在しない。この箇所は二人の持つ魂の共存共生

の魂をめぐっての愛と魂と心の絡み合いの場面である。

作者は、状況によって思考変化する空しい泡沫的心、即ち変性的自我の発起である表層自己の現世愛と、人間の奥底にある無限的不滅性の魂、つまり不変性的深層自己である魂への愛があると捉えた。キャサリンはスクラッシュクロス屋敷での5週間の間、今までの生活や人間関係とは全く異なった環境に置かれ、初めて人心が現実の中で左右されながら楽しさや安泰に執着する悲喜交々の世界を知った。一方、ヒースクリフは一貫して底流にある深層自己の魂の究極的融和に固執した。この二つの激突であった。キャサリンとヒースクリフが互いに求め合ったのは、空しくはかない表層的愛ではなく、不変性の魂を持った者同志が引き合う魂の融合であった。キャサリンは一方で、森の木の葉のように空虚だが現実の世界で一喜一憂する心の変化の楽しさを知った。このことはヒースクリフが抱く不変の魂との融合という願望とに意識のズレを生じさせた。

第10章

ヒースクリフの復讐が徐々に始まる。その理由は、(1)キャサリンがヒースクリフの魂との別離の不可能さを十二分に得心していながら、一般社会の表層的に空しい泡沫的心に操られエドガと結婚してしまい、彼女自らが共通の魂の成就を放棄したこと。(2)ヒースクリフを虐待し、二人の間を引き裂き、キャサリンとの魂の融合を妨げた人々、つまりアンショウ家とリントン家の人々に対する怨念である。

第4章から第9章に描かれている両者の関係は、幼い時から成人に至るまで様々な出来事を通して、互いに合い通ずる不変の魂への愛を持ち、益々絆が強固になる様が描かれている。これに対して15章、16章、29章では怨念の深さと激しい復讐、そして魂への愛の激越した情念が色濃く表現されている。

エドガ・リントンとキャサリン・アンショウはすでに結婚している。キャサリンはこよなくエドガを愛し、彼の妹イザベラにも愛情をそそいだ。リントン兄妹も心底から彼女を愛し気を使っていた。キャサリンは以前の病気のために気質が変わり憂鬱症になり情緒不安定であった。彼女には結婚感や義務感や道德感などがなくなっていた。

消息を経ってから3年ぶりにヒースクリフが姿を現わした。野蛮で無知で粗野な昔の面影はどこにもなく、背が高く、逞しく、姿勢が真っすぐで、堂々としていて、知恵に輝いた威厳と優雅さを備え、目は窪んで異様に光り凶暴さが潜んでいるようであったが、毅然とした態度の紳士になっていた。自分の魂であるキャサリンを奪った俗社会に復讐するために帰ってきたのである。

Ere long I heard the click of the latch, and Catherine flew upstairs, breathless and wild; too excited to show gladness: indeed, by her face, you would rather have surmised an awful calamity.

“Oh, Edgar, Edgar!” she panted, flinging her arms round his neck. “Oh, Edgar, darling! Heathcliff’s come back—he is!” And she tightened her embrace to a squeeze.

“Well, well,” cried her husband crossly, “dont’ strangle me for that! He never struck me as such a marvellous treasure. There is no need to be frantic!”

“I know you didn’t like him,” she answered, repressing a little the intensity of her delight. “Yet, for my sake, you must be friends now.

⁽²¹⁾ キャサリンはエドガに対する愛を表層の心的愛、ヒースクリフに対する愛を深層の魂への愛と認識していた。二人の強固な愛が次の状況表現に表れている。

He took a seat opposite Catherine, who kept her gaze fixed on

him as if she feared he would vanish were she to remove it. He did not raise his to her often: a quick glance now and then sufficed; but it flashed back, each time more confidently, the undisguised delight he drank from hers. They were too much absorbed in their mutual joy to suffer embarrassment. Not so Mr. Edgar: he grew pale with pure annoyance: a feeling that reached its climax when his lady rose, and stepping across the rug, seized Heathcliff's hands again, and laughed like one beside herself.

2人が再会し、秘められた激しい喜びの火花が飛び散り、その感情は極点に達したかのようであった。この日までヒースクリフは、キャサリンを自分のものにするために苦しい生き方をしてきた。彼と会ったその夜、彼女はエレンの寝室に入り込み、自分の幸せを誰か他の人に分けたいというほどであった。キャサリンがヒースクリフを尊敬に値する人物、最高の紳士、彼の友人になることは光栄であると誉めると、彼を憎んできたエドガは、不快になり嫉妬のために泣きだす。彼女は二人の男性に対しての愛の認識を区別している。彼女が考えている現実の愛と理想の愛である。表層的愛と深層的愛である。心愛と魂愛である。彼女は夫のエドガへもこの区別を要求するが、彼は理解できない。

The event of this evenig has reconciled me to God and humanity! I had risen in angry rebellion against Providence. Oh, I've endured very, very bitter misery, Nelly! If that creature knew how bitter, he'd be ashamed to cloud its removal with idle petulance.

ヒースクリフが、以前の浅ましきの面影を払拭し出現し、共通項である魂の出会いをもたらしてくれた。現実の肉体を持ち、共通の魂を持った愛する者に再会させてくれた。今まで心にあった煩惱を解き放し、終わらせてくれた。夫のエドガも、自分が苦悩と虚偽から脱却し安らぎの世界を得たことを喜ぶはずである。何故なら、妻の二重の心からでる精

神的不安定さを心配する必要がないからである。「もう終わったのだから、これからはどんなことでも耐えて行ける!…私は天使!」彼女は快活になり、恍惚の世界に浸る。求めていたヒースクリフとの魂愛が叶ったのである。

しかし新しい苦悩がはじまる。エドガの妹であるイザベラが外見とは裏腹なヒースクリフの内に秘められた計算的復讐心を判らずに心を惹かれ憧れていく。ヒースクリフは陰でほくそ笑んでいる。ヒンドリ・アンショウは土地を担保にしてはヒースクリフと博打をやり、酒に溺れ破滅の道をたどっていく。キャサリンにはヒースクリフが描いている情け容赦のない悪魔的貪欲な財産乗っ取り計画を実行して、自分たちを破滅させようとしていることを、すでに感知している。ヒースクリフは何か策略を巡らしているように考え込んでいる。

第11章

この章では、ヒースクリフが怨念を抱いている俗社会の人々に対して、心情的にも肉体的にも復讐の外堀を埋めていく。つまり、アンショウ家では、ヒンドリの子供であるヘアトン・アンショウを手懐ける。リントン家には、エドガの妹のイザベラに恋心を抱かせ近付く。一方では、エドガを侮辱し、暴言を着せ、脅迫し、激情し、喧嘩を仕掛け、心身共に破滅させる策略を練る。嫉妬を抱かせる。キャサリンはエドガとイザベラに注いだ愛情の空しさを覚える。キャサリンにとって魂であるヒースクリフと現実の今の恋人であるエドガの両者が必要なことを、エドガには理解しきれない。キャサリンは魂への愛と現世の愛を分離しているのである。

“To get rid of me, answer my question,” persevered Mr. Linton.

“You *must* answer it; and that violence does not alarm me. I have found that you can be as stoical as any one, when you please. Will

you give up Heathcliff hereafter, or will you give up me? It is impossible for you to be *my* friend and *his* at the same time; and I absolutely *require* to know which you choose."

"I require to be let alone!" exclaimed Catherine furiously, "I demand it! Don't you see I can scarcely stand? Edgar, you—you leave me!"

キャサリンは半狂乱になり、暴れ、長椅子に頭を叩きつけ、猛烈な歯軋りをし、息を弾ませて髪を振り乱し、目をきらきら輝かせ、体が異常に波打っている。彼女は部屋に閉じこもってしまう。

自分の愛をエドガがしっかりと受け止めてくれない絶望と、愛とは何かを硬直的にしか理解しない彼への嘆きである。と同時に永遠の魂を求めることの妨害へのやるせなさである。

第12章

"Oh, I will die." "And I dying! I on the brink of the grave!" Tossing about, she increased her feverish bewilderment to madness, and tore the pillow with her teeth; then raising herself up all burning, desired that I would open the window. We were in the middle of winter, the wind blew strong from the north-east, and I objected. Both the expressions flitting over her face, and the changes of her moods, began to alarm me terribly; and brought to my recollection her former illness, and the doctor's injunction that she should not be crossed. A minute previously she was violent; now, supported on one arm, and not noticing my refusal to obey her, she seemed to find childish diversion in pulling the feathers from the rents she had just made, and ranging them on the sheet according to their different species: her mind had strayed to other associa-

tions.

⁽²⁵⁾ 彼女は錯乱状態になり、精神的重病に落ちいていた。彼女は、幽霊がいると言ったり、絶え間なく震えたり、怯えきったり、恐怖の顔色をうかべたり、鏡をじいっとみていたり、地獄みたいな騒ぎになったり、急に我に返ったりした。そして、嵐が丘のヒースの花の中に、また帰って行きさすれば、自分を取り戻すことができるにちがいないとも言う。

But, supposing at twelve years old I had been wrenched from the Heights, and every early association, and my all in all, as Heathcliff was at that time, and been converted at a stroke into Mrs. Linton, the lady of Thrushcross Grange, and the wife of a stranger: an exile, and outcast, thenceforth, from what had been my world. You may fancy a glimpse of the abyss where I grovelled! Shake your head as you will. Nelly,

自分の世界から追放され、奈落の底に突き落とされた⁽²⁶⁾ということは、キャサリンの本当の生きる生命体の魂が幼い頃の世界にあったということである。その世界へ真から思慕の念を抱き、気が狂いそうになるまで追い求めたのである。それはまた、ヒースクリフと共に遊び過ごした日々で得た互の共鳴と、魂を共有した人間の本質的な狂喜であった。

熱に浮かされ、何も食べずに夢遊病者のように喪心状態になり、急速にやつれ、よろめきながら寒風の射し込む窓を開けさせ、強情なほど嵐が丘への思慕の念を募らせた。花の咲き乱れるうちに、死の憩いの場に行くという。そこは嵐が丘の墓石の下だという。

What you touch at present you may have; but my soul will be on that hill-top before you lay hands on me again. I don't want you, Edgar: I'm past wanting you.

⁽²⁷⁾ 強情なまでに激しい気性であったキャサリンはすべてを投げ捨て、無

私の境地に入り、現世に対する未練もすて、自分本来の願望に没頭し、心身を神に委ねようとする。それは深層的魂の世界へ向かってのことである。

I wish I were a girl again, half savage and hardy, and free; and laughing at injuries, not maddening under them! Why am I so changed? why does my blood rush into a hell of tumult at a few words? I'm sure I should be myself were I once among the heather on those hills.

子供の頃への思慕²⁸がつり、心と魂が競合していた時代に戻りたいという願望の表れである。

この夜、ヒースクリフとイザベラが真夜中に密会し、打合せて夜逃げする。義姉のキャサリンは、この時点ではまだ知らされていない。兄であるエドガは、彼女が自ら縁を切ったのだといい、世間の荒波へ向かって自ら出て行った者を追う必要性を認めない。

第13章

キャサリンは脳膜炎にかかり廃人同然となり、死の予感を感じながらもエドガの献身的看病で、彼に支えられながらも病室から出て歩けるまでに回復する。キャサリンの嵐が丘への郷愁は変わっていない。キャサリンに子供ができ、エドガはこれでリントン家は安泰という望みに燃える。

一方、イザベラ・リントンとヒースクリフは「嵐が丘」に駈落ちするが、その家の住民であるヒンドリも息子のヘアトンも召使のジョウゼフも、そして夫であるアンショウも全員が惨たらしく狂気地味ている。ヒースクリフの心の醜さを知り、彼の心について行けなくなり、彼の本性を計りかね愛が醒めてしまい、恐怖心と悲惨さに身震いするようになる。彼が愛していないにも関わらず結婚したのが、罠だったことに後か

ら気付く。エドガに対する怨念を俗社会の自分におつけていることを知る。イザベラは、ヒースクリフを狂人か悪魔か何かに見るようになり敵対心を抱くようになる。

キャサリンの兄で「嵐が丘」に住むヒンドリ・アンショウは賭博でヒースクリフに負け別棟に住むことになり、激しい怒りで狂人のようになっている。彼の子供であるヘアトン・アンショウは意地の悪い目付き、無礼な言葉使い、がらの悪さで悪態をつく。「嵐が丘」の屋敷は昔の面影がないほどに、そして人間も荒れはてている。

ヒースクリフはあえて妻のイザベラに暴言をはき、不都合な事をしいり、嫌悪感や不快感や恐怖感を抱かせ、彼女を嗜虐的に扱う。それはリントン家、特にエドガに対する復讐の一環であり、策略をめぐらす。

第14章

“quite possible that your master should have nothing but common humanity and a sense of duty to fall back upon. But do you imagine that I shall leave Catherine to his *duty* and *humanity*? and can you compare my feelings respecting Catherine to his? Before you leave this house, I must exact a promise from you, that you'll get me an interview with her: consent or refuse, I *will* see her!”

彼女への現世的かつ表面的な心の愛と義務感とだけを支えにして慈しんでいるような人間エドガには、キャサリンを任せておけない。表層的心ではなく深層的愛の結晶、つまり魂の融合がなければならないのである。ヒースクリフがキャサリンに会うのは、彼女自身に生命の危機を与え、そのことがエドガを苦しめることになることを、彼自身が感知してのことである。

I never would have banished him from her society as long as she desired his. The moment her regard ceased, I would have torn his

heart out, and drunk his blood! But, till then—if you don't believe me, you don't know me—till then. I would have died by inches before I touched a single hair of his head!"

キャサリンがエドガの表層的愛を受け入れて⁽³⁰⁾いる間は、エドガを引き裂き殺したいほど憎くても堪え忍ぶ。なぜならキャサリンを悲しみ苦しませ、回復する希望を完全に失わせ、生命の危機に落とすことにもなりかねないからである。もしもキャサリンの心情に何ら害を及ぼすこともなく、病気を悪化させることもないならば、エドガへ徹底的な復讐をし、キャサリンとの魂の融合は勿論のこと、全て自分のものにするということを意味している。

Two words would comprehend my future—*death* and *hell*: existence, after losing her, would be hell. Yet I was a fool to fancy for a moment that she valued Edgar Linton's attachment more than mine. If he loved with all the powers of his puny being, he couldn't love as much in eighty years as I could in a day. And Catherine has a heart as deep as I have: the sea could be as readily contained in that horse-trough, as her whole affection be monopolised by him! Tush! He is scarcely a degree dearer to her than her dog, or her horse. It is not in him to be loved like me: how can she love in him what he has not?"

ヒースクリフにとって、死とは無限の不変不滅の世界をさす。死の世界ではキャサリンとの魂の融合がある。しかし現世においても魂の融合がなければ、彼が一貫して抱いてきた現世から来世へと連なる不変不滅の愛の魂の融合はない。まさに「地獄」である。その意味において、ヒースクリフは現世でキャサリンとの魂の融合を果たし、死の世界では現世での魂の融合の永遠性を希求するのである。

現実社会における心的愛は変化するものであり、意味がない。その底

にある魂こそが大切なのだ。死によって互いの魂の融合を得ることができないかも知れない。できたとしても中途半端なものである。安らかに死の世界に止まることは出来ない。永劫不滅の魂がさ迷う地獄の世界となる。

Whatever he may pretend, he wishes to provoke Edgar to desperation: he says he has married me on purpose to obtain power over him; and he shan't obtain it—I'll die first! I just hope, I pray, that he may forget his diabolical prudence and kill me! The single pleasure I can imagine is to die or see him dead!"

イザベラを自殺に追いやったり殺したりすることは、エドガに対するヒースクリフの復讐が、その時点で終わることを意味する。このことを彼は計算済みであり、哀れみなど持ち合わせていない。虫けらを踏みつぶすほど歯軋りし、危害を加えんばかりになっている。

イザベラが死ぬことは、キャサリンを苦悩させて、エドガとの現世愛が間違いであることに気付かせ、その結果としてキャサリンを自分の元に取り戻し、魂の愛の融合を果たすということには直結しなくなる。現段階でイザベラが去ることは、その繋がりを断ち切ることであり、許されないことである。彼の意図したことが全て水泡に帰すことになってしまふからである。

ヒースクリフは、立ち入り禁止になっているリントン家に、ネリに無理強いをして侵入することになる。キャサリンの容態を知るためである。彼女が地獄の苦しみを味わい、不安に怯え、孤独に苛まれているとみなしている。これをエドガの人間愛と義務感だけではどうすることもできないと睨んでいる。

第15章

愛と苦悩の世界を描いており、激情、動揺、異常、絶望、興奮、発

作、錯乱状態などの表現が多く切迫感がある。

彼女はやつれて、あの世を追い求めて眺めているようであり崩れていくようである。ヒースクリフからの手紙の内容もひとりでは理解できなくなっている。

He neither spoke nor loosed his hold for some five minutes, during which period he bestowed more kisses than ever he gave in his life before, I dare say: but then my mistress had kissed him first, and I plainly saw that he could hardly bear, for downright agony, to look into her face! The same conviction had stricken him as me. from the instant he beheld her, that there was no prospect of ultimate recovery there—she was fated, sure to die.

ヒースクリフとキャサリンは長い間求めてきた魂⁽³³⁾の融合という愛を形成しようとするが、一方の死という避けがたい運命によって、現世での永遠不滅の愛の形成に不安の影をおとす。

“Oh, Cathy! Oh, my life! how can I bear it?” was the first sentence he uttered, in a tone that did not seek to disguise his despair. And now he stared at her so earnestly that I thought the very intensity of his gaze would bring tears into his eyes; but they burned with anguish: they did not melt.

キャサリンが死ぬことは、ヒースクリフにとって、自分から遊離したところに愛すべき魂が存在することになり、現世での愛の融合は不可能になる。絶望感を伴う苦悩である。

“You and Edgar have broken my heart, Heathcliff! And you both came to bewail the deed to me, as if you were the people to be pitied! I shall not pity you, not I. You have killed me—and thriven on it, I think. How strong you are! How many years do you mean to live after I am gone?”

Heathcliff had knelt on one knee to embrace her; he attempted to rise, but she seized his hair, and kept him down.

“I wish I could hold you,” she continued bitterly, “till we were both dead! I shouldn’t care what you suffered. I care nothing for you sufferings. Why shouldn’t you suffer? I do!”

ヒースクリフもエドガも、キャサリンの心を理解しなかった。二人は、愛には現世の肉体に灯る表層的愛と人間の深層にある精霊愛という二極性があること感知することなく、エドガは表層的愛のみを、そしてヒースクリフは表層的愛と同時に深層的愛をも渴望した。キャサリンは愛に二極性があることを得知し、分離してそれぞれの必要性を考え、究極的願望は深層的愛の結実であることを心得ていた。三人の思惑は異なっていたのである。

The two, to a cool spectator, made a strange and fearful picture. Well might Catherine deem that heaven would be a land of exile to her, unless with her mortal body she cast away her moral character also. Her present countenance had a wild vindictiveness in its white cheek, and a bloodless lip and scintillating eye; and she retained in her closed fingers a portion of the locks she had been grasping.

ヒースクリフにとって、キャサリンが永遠の死の世界に入ってしまったとしても、それは肉体そして表層的愛が現世から遊離することであり、深層にある精魂は両者の魂が融合しない限り遊離せずとどまる。彼にとって魂の融合がなければ、生でも死でもない。二人の魂が合体して初めて永遠の安らぎの霊となる。ヒースクリフが求めているのは、表層的愛と深層的愛を同時に得ることであり、どちらが欠如してもヒースクリフの願望は満たされない。キャサリンにとっては、肉体の消滅や表層的愛との離別は現世との別れであり、深層愛の結実が達成されずに肉体が滅

びることで、来世での魂の結実が実現できるのかという疑念と不安と、現実の願望が渦巻いている。

You know you lie to say I have killed you: and, Catherine, you know that I could as soon forger you as my existence! Is it not sufficient for your infernal selfishness, that while you are at peace I shall writhe in the torments of hell?"

キャサリンが死ぬ⁸⁷ということは表層的愛も深層的愛をも抹殺することを意味するが、ヒースクリフが望んだのは、同時に二つの愛を成就することであった。ヒースクリフにとって、キャサリンの肉体が減び表層的愛が欠如することは耐えがたい。キャサリンの身勝手さとは、ヒースクリフにとって両輪の一つである現世での表層的愛の大切さを彼女が切実に感じていないことである。

"Oh, you see, Nelly, he would not relent a moment to keep me out of the grave. That is how I'm loved! Well, never mind. That is not my Heathcliff. I shall love mine yet; and take him with me: he's in my soul. And," added she, musingly, "the thing that irks me most is this shattered prison, after all. I'm tired of being enclosed here. I'm wearying to escape into that glorious world, and to be always. there: not seeing it dimly through tears, and yearning for it through the walls of an aching heart: but really with it, and in it. Nelly, you think you are better and more fortunate than I; in full health and strength: you are sorry for me—very soon that will be altered. I shall be sorry for you. I, shall be incomparably beyond and above you all.

ヒースクリフは現世におけるキャサリンの愛⁸⁸についての考え方を憎悪している。それは彼女が表層的愛に翻弄され、ヒースクリフの思っていた表裏一体の両輪である愛を受け入れなかったからである。キャサリン

が画く彼との愛は精神的深層的魂の融合による愛であり、肉体に宿る愛は魂とは無縁のものであり重要ではない。死を通して魂の合体ができる永劫不滅の輝く世界、つまり何にも束縛されない無の世界へ行くことが彼女の望みである。両者の魂が合体した時には自由に飛び回ることができる。何の束縛もなく、意識することもなく、我もない、無の世界である。それが来世への思いである。

At that earnest appeal he turned to her, looking absolutely desperate. His eyes, wide and wet, at last flashed fiercely on her; his breast heaved convulsively. An instant they held asunder, and then how they met I hardly saw, but Catherine made a spring, and he caught her, and they were locked in an embrace from which I thought my mistress would never be released alive: in fact, to my eyes, she seemed directly insensible. He flung himself into the nearest seat, and on my approach hurriedly to ascertain if she had fainted, he gnashed at me, and foamed like a mad dog, and gathered her to him with greedy jealousy.

キャサリンは死に直面して、精神的かつ深層的魂の合体という愛を求め、ヒースクリフは彼女の残り少ない現世での愛と、輝く来世での不滅の魂の融合という愛、つまり全身全霊の愛を求めたのである。互いに掴み取り離すまえとした結果が、激しく求めあう恋人のような抱擁となったのである。しかし両者の認識のずれは解消されていない。

While he, in return, covering her with frantic caresses, said wildly -

“You teach me now how cruel you’ve been—cruel and false. Why did you despise me? Why did you betray your own heart, Cathy? I have not one word of comfort. You deserve this. You have killed yourself.

ヒースクリフはキャサリンが自分の心情を理解してくれなかったことに対し激怒し続けてきた。しかも、「ヒースクリフと結婚するなんて、私の身をどん底に落とすことだわ」(第9章)ということを目にし、幼い頃からのことを思い彼女の残酷さや裏切りや蔑視されたことに怨念を抱いてきた。こんなに激しく自分を愛していたにも関わらず、エドガ・リントンと結婚した。ヒースクリフが望んでいた彼女との現世での愛の結実、魂の融合を彼女自身が放棄し、自らを破滅に導くことになった。つまりキャサリン自身がヒースクリフの片肺をもぎ取る結果となり、両者の思慮情念の隔たりを生み出し、さらにヒースクリフの怨念を生み出し、現世とは無縁の地での魂の融合こそが生の証と考えていた彼女が、自らを苦悩に陥れる取り返しのつかない状態に追いやることになった。

Yes, you may kiss me, and cry; and wring out my kisses and tears: they'll blight you-they'll damn you. You loved me—then what right had you to leave me? What right—answer me—for the poor fancy you felt for Linton?

今、死を迎えようとしている彼女が、この時になって彼に愛を示せば示すほど、過去を顧みず来世での魂の融合という愛の確認を希求することになる。ヒースクリフは現世でも来世においても互いの情念の融合という愛の世界を望んでいた。それを知っていたにも関わらず、魂の融合の世界の一方を切り捨てた。あまりにも一方的であり許すことは出来ない。これはすべてから解放された、自分たちの思いのままの無の世界へではなく、自我残存の世界への願望である。永遠不滅の魂の融合愛の世界は無の世界である。

Because misery and degradation, and death, and nothing that God or Satan could inflict would have parted us, you, of your own will, did it. I have not broken your heart—you have broken it; and in breaking it, you have broken mine. So much the worse for me,

that I am strong. Do I want to live? What kind of living will it be when you—oh, God! would you like to live with your soul in the grave?”

⁽⁴²⁾
現世における二人の相互の魂の融合を暴力、憎悪、悲惨、嫌悪などで長い間、引き離そうとする妨害はあったが、分断することはできなかった。それにも関わらずキャサリン自らがそれを手懸けたのである。そのことによって、ヒースクリフに苦悩と絶望を与え、彼女に復讐を誓わせることになった。ヒースクリフの思いは現世や来世に関わりない魂の融合という愛の結晶の追求である。生と死という時制の流れを分断して魂の融合を考えることは出来ない。互いに愛を求めあった時から、肉体の存在があろうがなかろうが、そこには魂の融合があったはずである。魂の融合を終わらずして、一方の肉体が減びて、魂を抱き去ることは許されない。残された者には、融合が出来なかったことの絶望しかない。

“Let me alone. Let me alone,” sobbed Catherine. “If I have done wrong, I’m dying for it. It is enough! You left me too: but I won’t upbraid you! I forgive you Forgive me!”

“It is hard to forgive, and to look at those eyes, and feel those wasted hands,” he answered. “Kiss me again; and don’t let me see your eyes! I forgive what you have done to me. I love my murderer —but yours! How can I”

⁽⁴³⁾
彼女を許すことは、現世における表層的愛、エドガとの愛を是認することになる。魂の融合がなく苦悩してきたことを否定することになる。彼は一貫して魂の融合を求めてきた。彼女が、今、許しを請い、魂の融合がようやく可能になった段階まで漕ぎ着いたにも関わらず、彼女が死に絶えて、一方彼が現世に止まることは、再び互いの魂の遊離になる。だから命あるうちに、共に死の世界へ旅立ち、両者の靈魂融和の世界すなわち至福の世界、無の世界へ入界することを望むのである。しかし現

世において表層的愛のみを重視して、キャサリンを死に至らせたもの、つまりエドガの彼女に対する愛、幼いときのキャサリンが抱いていた純粹な精靈の愛を片手落ちの考え方に変えてしまった周囲の人間を許すわけにはいかない。

第16章

ABOUT TWELVE O'CLOCK THAT NIGHT, WAS born the Catherine you saw at Wuthering Heights: a puny, seven months' child; and two hours after the mother died, having never recovered sufficient consciousness to miss Heathcliff, or know Edgar. The latter's distraction at his bereavement is a subject too painful to be dwelt on; its after effects showed how deep the sorrow sunk.

上の文章は、夫であるエドガのキャサリンに対する表層的愛、つまり心的愛の終焉による絶望感が表現されている。

Edgar Linton had his head laid on the pillow, and his eyes shut. His young and fair features were almost as deathlike as those of the form beside him, and almost as fixed: but his was the hush of exhausted anguish, and hers of perfect, peace. Her brow smooth. her lids closed. her lips wearing the expression of a smile: no angel in heaven could be more beautiful than she appeared.

キャサリンはエドガに対する表層愛と、その愛以外に求められない不満と、ヒースクリフに対する深層愛とその表層愛を罵倒され責められ憎悪されたことに対して苦しんできた。そして今、死によってその表層愛からは開放され、一つの苦惱が消え去った。静寂な普遍的不滅の世界に入ったのである。まさに微笑みがこぼれるごとくである。しかし、靈魂の至福の世界に到達していない。これはヒースクリフの靈魂と交わることなく、なにものにも拘束されない無の世界に入ったとはいえない。

I instinctively echoed the words she had uttered a few hours before: “Incomparably beyond and above us all! Whether still on earth or now in heaven. her spirit is at home with God!”

自分の靈魂、それはヒースクリフの靈魂でもあるのだが、⁽⁴⁶⁾かき乱されることのない安静な永遠の世界、誰の手にも届かない世界、限りない命と限りない愛と限りない喜びの世界、至福の世界、つまり人間の存在価値の間われない利己心のない世界に入ると信じたのである。ヒースクリフの肉体と魂をこの世に残す結果になった。

“May she wake in torment!” he cried, with frightful vehemence, stamping his foot, and groaning in a sudden paroxysm of ungovernable passion. “Why, she’s a liar to the end! Where is she? Not there—not in heaven—not perished—where? Oh, you said you care nothing for my sufferings! And I pray one prayer—I repeat it till my tongue stiffens—Catherine Earnshaw, may you not rest as long as I am living! You said I killed you—haunt me, then! The murdered do haunt their murderers, I believe. I know that ghosts have wandered on earth. Be with me always—take any form—drive me mad! only do not leave me in this abyss, where I cannot find you! Oh, God! it is unutterable! I cannot live without my life! I cannot live without my soul!”

キャサリンは、再びヒースクリフを裏切る結果となった。⁽⁴⁷⁾彼女は、自分の表層的愛に死という形で終止符を打ち、ヒースクリフと共に求めた深層的愛を伴った靈魂の融合を果たさずに他界した。ヒースクリフが望んだのは、表層的愛と深層的愛の同時性であり、このいずれが欠けても、至福の靈魂には成りえないというのが彼の認識であった。この視点からするならば、キャサリンが死に、表層的愛が消滅したとしても、彼女は嬉々とした精霊の世界に入ったとは言いえない。その世界に入れず

浮遊しているに違いない。彼女の穏やかな死顔は、現世という表面的世界から逃避できた喜びに過ぎない。二人の愛の原点である靈魂の融合を全うしていない。ヒースクリフの苦悩は、己れの偶像が消え去って行く面影に固執し苦しんだのではなく、自分を振り切って、死の世界に旅立ち、表層的愛を二度と獲得できなくされてしまったことに対する痛恨の悔しさとその怨念であり、ただ一つ残された彼女との深層的愛を求めて現世と他界との狭間で苦悩せざるをえないヒースクリフの心情である。

この章では、キャサリンの死と、不滅の世界、そして死者と自分の巻き毛をよじあわせたとはいえ、魂が離別したのではないかという彼の不安を述べたものである。

第28章

エドガは法悦を抱きながら死んだ。それは、「私は、あの人のところ行くよ。かわいいキャシ、おまえも、いつか私たちのところえおいでよ」と言い残したのだが、エドガがキャサリンを思う愛の気持ちは、ヒースクリフの思う愛の観念と異なり、現世での愛が来世でも継続すると確信した普遍的信念に基づいたものであった。

第29章

"I'll tell you what I did yesterday! I got the sexton, who was digging Linton's grave, to remove the earth off her coffin-lid, and I opened it. I thought, once, I would have stayed there: when I saw her face again—it is hers yet! — he had hard work to stir me: but he said it would change if the air blew on it, and so I struck one side of the coffin loose, and covered it up : not Linton's side, damn him! I wish he'd been soldered in lead . And I bribed the sexton to pull it away when I'm laid there, and slide mine out too; I'll have it

made so: and then, by the time Linton gets to us he'll not know which is which!"

現世では叶わな⁽⁴⁸⁾かった魂の融合という愛への願望を、初めて具体的な形をもって、必ず完遂するという執念を示した。

"and I gave some ease to myself. I shall be a great deal more comfortable now; and you'll have a better chance of keeping me underground, when I get there. Disturbed her? No! she has disturbed me, night and day, through eighteen years—incessantly—remorselessly—till yesternight; and yesternight I was tranquil. I dreamt I was sleeping the last sleep by that sleeper, with my heart stopped and my cheek frozen against hers."

18年間、苦悩し続けてきたキャサリンへの⁽⁴⁹⁾思いが、ようやく自ら手元に呼び寄せることができたという満足感がにじみ出ている。つまり、永遠に離れることない、しかばねとなっても、形の合体と魂の融合を成し遂げた、という夢を表した。

You know I was wild after she died; and eternally, from dawn to dawn, praying her to return to me her spirit! I have a strong faith in ghosts: I have a conviction that they can, and do, exist among us! The day she was buried there came a fall of snow. In the evening I went to the churchyard. It blew bleak as winter—all round was solitary. I didn't fear that her fool of a husband would wander up the den so late; and no one else had business to bring them there. Being alone, and conscious two yards of loose earth was the sole barrier between us, I said to myself—'I'll have her in my arms again! If she be cold, I'll think it is this north wind that chills me; and if she be motionless, it is sleep.' I got a spade from the tool-house, and began to delve with all my might—it scraped the coffin;

I fell to work with my hands; the wood commenced cracking about the screws; I was on the point of attaining my object. when it seemed that I heard a sigh from some one above, close at the edge of the grave, and bending down. 'If I can only get this off,' I muttered, 'I wish they may shovel in the earth over us both!' and I wrenched at it more desperately. still. There was another sigh, close at my ear. I appeared to feel the warm breath of it displacing the sleet-laden wind. I knew no living thing in flesh and blood was by: but, as certainly as you perceive the approach to some substantial body in the dark, though it cannot be discerned, so certainly I felt that Cathy was there: not under me, but on the earth. A sudden sense of relief flowed from my heart through every limb. I relinquished my labour of agony and turned consoled at once: unspeakably consoled. Her presence was with me: it remained while I refilled the grave, and led me home.

キャサリンの肉体が減んでも、彼女の⁵⁰靈魂はヒースクリフとの融合を待ち望み、常に自分の周りに思い焦がれ浮遊していると信じた。彼は、それを肌で感じ、どうすれば、現存し肉体を有する自分と、他界した彼女の靈魂とが融合できるか、苦悶し続けてきた。幼き頃、二人が共通に抱いていた信頼感溢れる心の根幹の権利を、打ち砕き続けた人々に対するはかり知れない憎しみ、現世の愛に惑わされた彼女に対する強烈な怨念、自分の愛についての強固な概念との葛藤の連続であった。身をかきむしるほどの恋しさと、見えそうで、見えない彼女を一目見たいという強烈な思いと、もどかしさを感じながらも、彼女との魂の融合の可能性を察知した。しかしそのもどかしさは、まさに地獄であり、悪魔に取りつかれように神経をギリギリ絞り攻められるような拷問であった。

第33章

I have a single wish, and my whole being and faculties are yearning to attain it. They have yearned towards it so long, and so unwaveringly, that I'm convinced it *will* be reached—and *soon*—because it has devoured my existence; I am swallowed up in the anticipation of its fulfillment. My confessions have not relieved me; but they may account for some otherwise unaccountable phases of humour which I show. O God! It is a long fight, I wish it were over!"

⁶¹⁾ 彼は、何か奇怪な空想に取付かれたように、失った偶像を追い求めるように、心の動揺を見せはじめた。死を望んでいるのではないが、「この状態を続けていくわけにはいかない」と言う。心臓の鼓動をむりやり、自分に言いきかせながら動かしている状態であった。独り言を言い、一人で居ることが多くなり、食事もろくに取らなくなり、言葉少なくなっていく。

第34章

"Why, almost bright and cheerful. No, *almost* nothing—*very much* excited, and wild and glad!" she replied.

"Night-walking amuses him, then," I remarked, affecting a careless manner: in reality as surprised as she was, and anxious to ascertain the truth of her statement; for to see the master looking glad would not be an every-day spectacle. I framed an excuse to go in. Heathcliff stood at the open door, he was pale, and he trembled: yet, certainly, he had a strange, joyful glitter in his eyes, that altered the aspect of his whole face.

⁶²⁾ 夜皆が寝静まった頃に外出し、朝食を終わって一段落したころ帰って

きた。

彼の行動は不可解なものになっていった。つまり、不自然な喜びの色、血の気のない顔色、奇妙な微笑み、ぴんとはりつめた綱が振動するような脈動を感じさせるようになった。キャサリンの魂が、自分の身の近くに浮遊しているのを感じ、誰にも邪魔をさせまいとした。それは外でも家のなかでもである。益々彼の顔付きは驚愕するほど恐ろしい悪鬼に満ちたものとなった。苦悶と恍惚を同時に与えている近くの何物かに、興奮の表情をしながら目をこらし追い求め、目を離そうとしなかった。まさに不気味な狂気の感情の虜になった状態であり、キャサリンの亡霊に翻弄されていたのである。キャサリンの名を口にし、ぶつぶつ言いながら、目の前にいるキャサリンに話しかけているようであった。

I tell you I have nearly attained *my* heaven; and that of others is altogether unvalued and uncoveted by me”

キャサリンとヒースクリフだけの世界の創造の地を示している。そこは現世において、制約の中で表層的愛に翻弄されてきた人間がたどりつく天の地ではなく、人間本来の根底に持っている魂の自由な世界である。

His eyes met mine so keen and fierce, I started; and then he seemed to smile. I could not think him dead: but his face and throat were washed with rain; the bed-clothes dripped, and he was perfectly still. The lattice, flapping to and fro, had grazed one hand that rested on the sill; no blood trickled from the broken skin, and when I put my fingers to it, I could doubt no more: he was dead and stark!

I hasped the window; I combed his black long hair from his forehead: I tried to close his eyes: to extinguish, if possible, that frightful, life-like gaze of exultation before any one else beheld it.

They would not shut: they seemed to sneer at my attempts: and his parted lips and sharp white teeth sneered too!

幻覚に襲われてから4日間絶食しそして死に、⁶⁴ ヒースクリフは求めていた法悦の世界に入ったのである。

But the contry folk, if you ask them, would swear on the Bible that he walks: there are those who speak of having met him near the church, and on the moor, and even in this house. Idle tales, you'll say, and so say I. Yet that old man by the kitchen fire affirms he has seen two on 'em, looking out. of his chamber window, on every rainy night since his death: and an odd thing happened to me about a month ago. I was going to the Grange one evening—a dark evening, threatening thunder—and, just at the turn of the Heights, I encountered a little boy with a sheep and two lambs before him; he was crying terribly; and I supposed the lambs were skittish, and would not be guided.

“What's the matter, my little man?” I asked.

“There's Heathcliff and a woman, yonder, under t' nab,” he blubbered, “un' I darnut pass 'em.”

二人の魂は永遠にさ迷い続けるのだろう。⁶⁵ 魂の融合ができないままに浮遊しているのである。それがヒースクリフが求めていた魂融合への愛の入り口の世界なのだろう。彼らの成し遂げれなかった世界は、果てしなく続いている。ヒースクリフの喜びは、自己の死によってようやく彼女と同じ境遇に入った喜びに過ぎない。

(三)

この作品で描かれている愛は(1)現実社会における愛、即ち絶えず周囲の状況によって左右される心の愛、つまり表層的愛と(2)社会から隔絶し

て、現世においても、来世においても変わることのない魂と自由の愛、即ち靈魂融合の愛の世界である無の世界、つまり深層的愛であった。キャサリンは不変不滅の魂と自由への愛を信じながら、一方で現世の現実には魅惑され、表層的愛を享受した。エドガは表層的愛を当然のごとく大切と考えた。ヒースクリフは不変の深層的愛のみが真実の愛であり、現世においてそれが融合されて来世に繋がり、靈魂の世界、無の世界へ飛躍すると信じた。「嵐が丘」における愛の交錯は両者の考え方の相違によって生じたことだが、ヒースクリフの強欲なまでに愛の奪取をしようとするのが、幼き日のキャサリンの根底の心情をかきたて、苦悩を彼女に呼び起こさせた。ヒースクリフは、彼女と同じ根幹の魂と自由を持っているからには別離はありえないと真に信じていたが、彼女の現実の世界における表層的愛という裏切により、それが怨念となり彼女を熾烈に責めると同時に、彼女を取り巻く全ての破壊を試みた。周囲の全ての破壊こそが、再び彼女を引き寄せ、二人の信じていた魂と自由への愛の形成に繋がると信じたのである。第29章でも、今まで述べてきたことを切々と記している。第17章から第34章は、現世に取り残された片肺のヒースクリフが魂の融合を求めた際の苦悶と渴望、そして、これを妨害した周囲の人々に対する執拗な復讐が主たるストーリーとなっている。しかし、二人の根幹を断ち切った者達に、冷酷で熾烈な復讐をして取り返そうとした魂の愛は、ヒースクリフが自分の死によって、誰にも邪魔されない二人の共通の世界に立ち入った。彼の死に顔はその喜びを表している。しかし、分身の一体化という法悦の融合された魂と自由という靈魂の世界には到達できず、二人の靈魂は定まらない世界で浮遊せざるをえなかった。それが彼が求めた魂と自由への愛の世界への旅立ちだったのかもしれない。まさに30年をかけて追い求めた自分たちの理想的な深層的魂融合の愛を究極的なものとして壮烈で悲痛に求め続けた苦悩の世界であった。

「嵐が丘」の愛の概念について (八十木)

注

- (1) 駒澤大学北海道教養部論集第9号 (1994) pp. 71-82
- (2) THE BRONTËS 英米文学評伝叢書-52-, 石井誠著, (研究社, 1985)
pp. 98~99
- (3) Wuthering Heights (Modern Library College Editions, 1950) p. 44
- (4) Ibid., p. 49
- (5) Ibid., p. 51
- (6) Ibid., pp. 53~54
- (7) Ibid., p. 54
- (8) Ibid., p. 54
- (9) Ibid., p. 56
- (10) Ibid., p. 59
- (11) Ibid., p. 63
- (12) Ibid., p. 66
- (13) Ibid., pp. 72~73
- (14) Ibid., p. 77
- (15) Ibid., p. 80
- (16) Ibid., p. 81
- (17) Ibid., pp. 94~95
- (18) Ibid., p. 95
- (19) Ibid., p. 96
- (20) Ibid., p. 96~97
- (21) Ibid., p. 111
- (22) Ibid., p. 113
- (23) Ibid., p. 117
- (24) Ibid., p. 139
- (25) Ibid., p. 143
- (26) Ibid., p. 147
- (27) Ibid., p. 148
- (28) Ibid., p. 150
- (29) Ibid., p. 174
- (30) Ibid., p. 174
- (31) Ibid., p. 175
- (32) Ibid., p. 178
- (33) Ibid., p. 185
- (34) Ibid., p. 185~186

「嵐が丘」の愛の概念について (八十木)

- (35) Ibid., p. 186
- (36) Ibid., p. 186~187
- (37) Ibid., p. 187
- (38) Ibid., p. 188
- (39) Ibid., p. 188~189
- (40) Ibid., p. 189
- (41) Ibid., p. 189
- (42) Ibid., p. 189
- (43) Ibid., p. 189
- (44) Ibid., p. 193
- (45) Ibid., p. 194
- (46) Ibid., p. 194
- (47) Ibid., p. 197
- (48) Ibid., p. 339
- (49) Ibid., pp. 339~340
- (50) Ibid., pp. 340~341
- (51) Ibid., p. 385
- (52) Ibid., p. 387
- (53) Ibid., p. 395
- (54) Ibid., p. 397
- (55) Ibid., pp. 398~399